

# 水虎の涙

Suiko no Namida



彬原希勇

野辺水辺に精霊あり

人の内に怪あり



目次

はじめに	5
序章	7
第一章 依頼と伏線	10
第二章 殺人と推理	46
第三章 毒殺と確信	97
第四章 真実と全容解明	138
終章	171
あとがき	175

水虎の涙【登場人物】

宝家 圭介	(31)	敏腕私立探偵
佐和 雄一郎	(78)	佐和邸の主で大地主
佐和 俊也	(45)	雄一郎の長男
佐和 紀代美	(37)	雄一郎の長女
佐和 美幸	(28)	雄一郎の二人目の妻の連れ子
佐和 温子	(55)	雄一郎の三人目の妻
西野 博志	(56)	ウエスト・リゾート・カンパニーの社長
大久保 和典	(63)	郷土史研究家で雄一郎の親友
原田 倫子	(62)	佐和邸の住込み家政婦
遠藤 茜	(24)	佐和邸の通いの家政婦
下崎 みち子	(58)	村の温泉旅館の女将
市松 鉄二	(47)	所轄の刑事課長
元木 明信	(71)	所轄の検死官で町医者
船田 幸一	(36)	所轄の刑事
上原 智成	(28)	温泉旅館の元板前
小林 むつき	(42)	私立探偵で物語の語り手

## はじめに

わたしが書く推理小説には、ひとつの拘りがある。「一人称<sup>いびん</sup>」だ。一人とは語り手のことで、物語は彼の目や耳などの感覚を通し語られていく。

わたしが尊敬する唯一にして無二のミステリー作家、ヴァン・ダインの作風が一人称であった。読み進むにつれ、まもなく語り手と自分がリンクし、1930年代のニューヨークにタイムスリップして巻き込まれる殺人事件。自分が、登場人物たちと同じ時間と空間の中で事件を体験するのだ。

主人公は自分の側に存在するので、彼の観察や意見を参考に自分なりの推理を組み立て犯人を捜す。その臨場感たるや：ページを捲る指先は震え、胸が張り裂けるほどの鼓動を感じた。こうした感覚の原因は、時間の経過とストーリー展開が完全に重なっていることだ。話が前後しない。場面があちこちに飛ばない。現在からいきなり十年前にジャンプしたり、たった一行で地球の反対側へ連れて行かれては、とても推理に集中できない。(わたしの思考が単純なだけかも……)

一人称でなくても、推理小説は時間軸を一本にすべきと言うのが、わたしの持論である。

さて、この作品「水虎の涙」も一人称形式の物語だ。わたしの作品群に、正統派探偵小説の「乃木坂探偵事務所」というシリーズ物があり、その中に四作収めた本格長編推理作品のひとつである。他の三作品にはトリックやアクションを使ったが、「水虎の涙」は古典的な推理小説、いわばクラシック。

ミステリーだ。

冒頭にいきなり人が殺されたりしない。派手な立ち回りや銃撃戦もない。物語は限られた空間と一本の時間軸の中で静かに進み、やがて事件発生。調査、推理、確信、そして解明。現代社会の速度に慣れた読者諸氏は、事件発生までが長く感じてしまうかもしれない。しかし、これがクラシック・ミステリーなのだ。

読者諸氏は語り手と一緒に物語の舞台に立ち、その空間で展開するすべてを感じ取ってほしい。時間、風景、出会う人々の言葉。いたるところに様々な伏線が潜んでおり、最後の主人公の謎解きでそれらが繋がるのだ。クラシック・ミステリーの醍醐味である。

読者諸氏は、主人公と競争してはいいかがだろう。伏線を発見して組み立て、彼より早く真犯人が特定できるだろうか？

映像は、見方を変えればイメージの押し付けだ。しかし、文字は読む人それぞれの世界が脳裏に展開する。あなたの想像力と推理力で、これから始まる連続殺人事件の真相解明に挑戦してみたいかがだろう。そして、わたしが体験した一人称推理小説の臨場感と興奮を、少しでも感じてもらえれば、作者として嬉しい限りである。



## 序章

鏡を見つめ、ふと考えたことがある。自分の本質は善人か、それとも悪人か。

ずいぶん昔のことだが、ヒトの性善説と性悪説について、友人と徹夜で激論を交わした思い出がある。それは、卵が先かニワトリが先かの議論と同じレベルでも、唯一、彼とわたしが同意したのは「嘘」だった。

地球上のあらゆる生命体の中で、「嘘」は人間だけが持つ独特の感情である。自分の身を守ろうとする保身本能は、ヒトもヤドカリも持ち合わせている。保身のために、真実と違う話を口にする行為がいかにも人間らしい……と言ってしまうえばそれまでなのだが。

わたしの名前は小林むつき。現在42歳の、どこにでもいそうな中年男である。

平凡極まるサラリーマン生活を二十年と四ヶ月積み重ねたある日、運命の人と出逢いわたしの人生が変貌した。探偵稼業という未知なる世界へわたしをいざなった人物こそ、今回の物語の主人公だ。

実にミステリアスな人物である。18歳までの名前は「宝家香織」、そして31歳の現在は「宝家圭介」と名乗っている。男の名前で、普段の言葉使いも男性そのものだが、この人物はあらん限りの美を兼ね備えた、いわば「現世のヴィーナス」だ。

身長183センチのしなやかな細身、長い手足。緩やかなウェーブで背中へと流れる栗色のロング

ヘアは、一本一本が上質な絹糸のようだ。陶器のように真っ白い素肌と、小さい卵型の顔面、そして、長い睫を従えた二重の大きな両眼。その奥で理性と知性の光を放ち続ける瞳は、秋を迎えた栗の色だ。まさに吸い込まれるような、深く芳醇なブラウンである。高く長い鼻筋も理想の位置にあり、唇は圧倒的な色気を醸し出す。

女性として最高の美貌と気品と色気を備える人物だが、圭介と名乗り男言葉を使い続ける限り、物語の中では「彼」と記していく。ただ、圭介の人格を正しく伝えるために記すが、彼はニューハーフでも性同一性障害でもない。

乳癌で乳房を失ったときに、彼の人生観が変わっただけだ。わたしと出逢ったときはすでに宝家圭介だったが、わたしは彼を女性として、生涯をかけて愛し続けるだろう。

そう、宝家圭介は仕事のパートナーであり、わたしの愛する人でもあるのだ。

さて今回の事件発生は、圭介とわたしが探偵事務所を開業してから半年ほど過ぎたころだった。この先何十年と続ける探偵稼業の中でも、これを上回る大仕事はそうはないと思う。人間の様々な感情が複雑に絡み合い、さらに、不気味な影が見え隠れする怪事件だ。これに匹敵する大仕事は、クロール人間に驚愕し、拳銃の自動発砲トリックに舌を巻いた「ヘル・ハウス殺人事件」だけだろう。

今回、圭介とわたしが挑んだ大仕事「佐和邸連続殺人事件」の重要ポイントは、冒頭で語った人間の特質たる「嘘」と、謎解きでは絶対的に必要な「目撃」である。

誰が何を見て、誰の言葉が嘘でそれをどう見抜くか。宝家圭介の類稀な才能が冴え渡る。



所轄のパターン化された捜査だけではお宮入りになったはずの怪事件を、僅か三日で解決した物語だ。

また、この事件の舞台となる佐和邸の場所は、被害者の要望で詳しく記さない。北関東の山裾に広がる、素朴な山里の「水神村」とだけ紹介しておく。

それでは、事件の語りを始めよう。宝家圭介が、鋭い観察力と深い推理力で挑戦する連続殺人事件だ。秋真っ盛りの、のどかな山村で過ごす驚愕の三日間である。



## 第一章 依頼と伏線

わたしは、助手席の窓を少し開けた。辺り一面を包む季節の色の乱舞を、さわやかな風と共に楽しむように思ったのだ。極彩色に染まる山間のドライブ・ウェイ。山桜の紅色、イチヨウの黄色、マツの緑が目染みて、わたしは日本の秋の美しさを改めて実感していた。そんな季節の色に溶け込む真っ赤なスタイリッシュ・ボディのフェラーリ599フィオラノは、圭介の愛車である。絶世の美形が高級スポーツカーのハンドルを握る姿。見慣れたはずでも、溜め息が出る。

十月二十五日火曜日の午前。群馬県北部の国道120号線、通称ロマンチック街道をひたすら北上中であつた。

今回の仕事は、スタートから少し異例だつた。二日前、南青山の乃木坂通りの探偵事務所に、ひとりの初老紳士がやつて来た。彼は大久保和典と名乗り、依頼の内容はわたしたちが仕事をすべき場所で話すと言う。その場所の様子を実際に見たあとで、話を聞いてほしいと言うのだ。こうした依頼は初めてでも、圭介が了解したので一泊二日の出張となつた。大久保と会うべく、彼が指定した水神村の旅館に向かつているのだ。

「ウィンドウを閉めろ、むつき」

ほそりと圭介。透けるように真っ白い素肌の彼には、淡い色彩の装いがよく似合う。今日はギャザーたっぷりのパウダーピンクのオーバードレスに白いレザーベストを羽織り、ボトムはベージュのス